特別
チ3
3816
56

金閣 00001

鶴田山房

序

私共迂闊の文集を出しさいといふ玉稿堂の事情を取次ぎに来えられたのであつた。生憎私は其道社の話あで色々いふ同じ種類のものをつい半月位前に出けにしてばうりの所でもつくつたので其の勧誘を受けるかばそらふのつく。そこで「さへ私の本意ゆるいのざふとそつ嫌野つた。然し私本員の決意の思つたら故強き

田村

00062

漱石山房

断るのに中々骨が折れる。仕方がないから
剣丸ナト手本据つても
らがやまあ方針を立て、もう少し具体的
に研究して御覧なさい。
当の書物が編輯されたら是非お送り下さい。其時
改めて拝読しませうと云つて帰した。
私は四辺の様子から御推察の出来さうなものだが
と思つてゐる。一旦是を着けた様な顔も
怫然撤回する に違ないと思つてゐる。其の夫で私
斯う云ふ重荷が来る人の面会を申し込んで
来る時に、私は手紙で返事を
出さずに会ふ人を選んで手紙で用

0091.3

信

誌
鶴屋山房

を活きしさの到底豊富の所物をうるせうもの
のは出来上らないうぢ為はじめちきいと赤
先しさの私もさうなばかり活ノ苦しさ仕ふ
いとも甲し活ノさの旅第七
所が拙ちえ道男説まも長い書面を
活めて持こ子性を作へて書くの文は現に私の書
物を買ひ集めを拙なのこめを小を孫うずかき
ぶいとしまつくとのいようである。夫ちも体色
へもナ中のんの迷の私の第なしこ旨を仕完
しをしまつくといようである。今更書に

00004
金剛

瀧田白山房

こはお互におすゝめ合ふの信用を拠るべき程度
に弟子し〻気れといふまでである。其中まはこの
やうな白さへあつて。
「理学と申しますは他人の化物までに責任
に負義を貸しまり又は責任の言葉を信
じしまりすることでまして。併し先生のは
それと違つて先生の化物が私に教へ
きれるまでに成功
されつつ、後方に形を変へて芸術
大[illegible]を示すものぎないと私は思ひ
き

まづ。笑し世の中に茅化種といふものがあります。
いと便利しさうなものです、昔の人のよ
いなかいどしく和歌学者さんらしいもの
をれを世ろでは花食と謂めるものは誠も
ありますまいが。茅と仏のものがあれ
ば夫は嬉みです。併しそれとも
経文がありますが、今度和の在てまるの
はずと方面が違つてゐますから、まづ一冊
位許しにうつしてもらつてもよ
ろしうございます。

00016

金剛

白山房

もも、書面を後ながら和い

拙とうく許後をよしなに少ばまうす

くろうとは、それ（仲間）だけを言うと言葉

しないやうに、又（）（）（若者）

（）は代吸であるこうに支

いふ注意も與へる。（いびせう）

同じものを活刷にしさり全体にしさり

する上に、方々ふ（其）部分を取りこまれと

文選版のものを他るのは若者ふ又ふば

一つものをこまもこまも注意に強い

ゝ変りはけちやうに人えも清きさのだ

金閣 瀧石山房

はちろう、それを男子人の天子ぶんと、みん高
きくぶあつて、持いのがぬきごつら多い
のが欲しうつくり。大きいのが飾りさうつら、
ふさいのが上ち歩きさうつくりするのを、
それぐ上ちの言田に多じて出版するのを
と云けれいば私もそれ上である。若者もが
うべく自分のあいくものが世の中に及きるう
はん

春でもあり各でもあり。と考へるは上が
ざとそれを知へつる人あも無うらうと考つて、

（三三）

△手紙欲しいとの事がへて、

すこぶるよしとの
たゝ家あすはつ
夏目金之助